

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サラザンのマザリナード : 古典主義文体へ向けて
Author(s)	ジュヌチオ, アラン
Citation	フランス文学 , 33 : 59 - 76
Issue Date	2021-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051035
Right	
Relation	



サラザンのマザリナード — 古典主義文体へ向けて¹⁾

アラン・ジェヌチオ

1656年、アカデミ・フランセーズの会員ポール・ペリソン²⁾は、2年前に死んだジャン-フランソワ・サラザンの『作品集』のための序文を認めた。サラザンを称賛する文でありながら、当時飛躍的發展をとげていた正真正銘雅な恋愛³⁾美学の声明文⁴⁾である。ペリソンは、サラザンという作家が複数のジャンルで他の追随を許さず、「ひょうひょうとジャンルの枠を飛び越えて」書くことのできる、多彩な才能の持ち主であったと主張している。

神話に登場するプロテウスや博物学者の扱うカメレオンでも、サラザンほど容易にその姿を変えはしないだろう。サラザンは真面目な事柄と雅な恋愛事とを調和させる。非常に崇高な詩をつくりもすれば、極めて卑しい詩作もする。韻文のみならず、理性に適うよう、散文で書きもする。見事に歴史も執筆するかと思いきや、それでも対話やはたまた小論文をものしりする⁵⁾。

1614年カンに生まれ、1635年パリに上京してきたサラザンはポリグラフ、すなわちどのジャンルでも書く作家であった。サラザンは政治・外交分野で経験を積んだ。1637年から1644年まで外務担当の國務秘書官であったレオン・ブチリエ・ド・シャヴィニ⁶⁾に仕え、その後は1648年に高等法院のフロンド⁷⁾が始まるまで、パリ大司教補であったジャン-フランソワ・ポール・ド・ゴンディ⁸⁾の庇護を受けていた。フロンド時にはコンチ親王⁹⁾の秘書となる。シャブラン¹⁰⁾、メナージュ¹¹⁾、

¹⁾ 本訳稿の成立と翻訳の経緯については訳者による付論で説明する。以下では原註と訳註を区別した。原註とは講演者による註を指す。但し、付論で説明するように本講演の基となる論考の註も挿入し、本訳稿を補うことにした。原註以外はすべて訳註である。

²⁾ Paul PELLISSON-FONTANIER (1624-1693) 最初の『アカデミ・フランセーズの歴史』を執筆した。フーケの食客で後にルイ十四世により修史官に任命されている。

³⁾ 本訳稿で登場する古典主義の特徴を表すキーワードにはルビカが傍点が付されている。訳者による付論を参照されたい。

⁴⁾ (原註) *L'Esthétique galante, « Discours sur les Œuvres de Monsieur Sarasin » et autres textes de Paul Pellisson*, éd. Alain VIALA et al., Toulouse, Societe de litteratures classiques, 1989.

⁵⁾ (原註) Paul PELLISSON, *Discours sur les Œuvres de M. Sarasin*, dans Jean-François SARASIN, *Œuvres*, éd. P. FESTUGIÈRE, Champion, 1926, t.I, p.132.

⁶⁾ Léon Bouthilier de CHAVIGNY (1608-1652).

⁷⁾ 1648年から1653年にフランスで生じた内戦。訳者付論を参照のこと。

⁸⁾ Jean-François Paul de GONDI (1613-1679) 後のレ枢機卿を指す。

⁹⁾ Armand de Bourbon, prince de CONTI (1629-1666) 後出するコンデ親王の弟。

¹⁰⁾ Jean CHAPELAIN (1595-1674).

¹¹⁾ Gilles MÉNAGE (1613-1692) .

デュピュイ兄弟¹²⁾の書齋、ゴンディのアカデミなど、サラザンは作家として当時の学識ある人々の間ではよく知られた存在であった。1639年にはシャプランの影響で、ダニエル・ハインシウス¹³⁾の作品を基にした『悲劇論』を執筆している。歴史を書くように勧められたサラザンは、コンデ親王¹⁴⁾を讃えて1649年に『ダンケルク包囲戦の歴史』を書いているが、他にも未完に終わった『ヴァレンシュタイン¹⁵⁾の陰謀』、今では失われてしまった『クローヴィス』なる作品も執筆している。そしていわば「新たな学識者」の肩書きで、ランブイエ館を代表とする、当時飛ぶ鳥を落とす勢いであった社交界に出入りしていた。しかしランブイエ館では先輩格にあたるヴァンサン・ヴォワチュール¹⁶⁾から邪険に扱われてしまう。そこでサラザンはヴォワチュールの死後の1649年に皮肉たっぷりの『ヴォワチュールのお葬式』を書いて復讐する。ヴォワチュール同様、気晴らしを提供する社交界の詩人、雅な恋愛詩人であったサラザンは、クレマン・マロ¹⁷⁾風のおどけた擬古調を復活させ、人をからかう洗練された技術と、優雅で才気あふれる技術を発展させる。そればかりではない。当時ソクラチヌとあだ名されたベルトー嬢、すなわち将来のモットヴィル夫人¹⁸⁾、そしてシルヴィという田園詩にちなむ名をもつロングヴィル公夫人¹⁹⁾にむけて、陽気で雅な恋愛術を実践する。大衆に彼の才能を知らしめた『作品集』では、フロンド期に執筆されたテキストへの言及はない。匿名で執筆された散文はもちろん、当時の状況を反映した詩も、1640年代にロングヴィル公夫人のために書かれた、政治的に無害な恋愛詩への言及もない。それらは1674年に刊行された『新作品集』でようやく収録されることになる。その頃にはロングヴィル公夫人は、もうずいぶん前から社交界を退いていた。サラザンの執筆した、詩と散文からなるマザリナードを研究すれば、フロンド期を通じてロングヴィル公夫人とコンチ親王に筆で仕えた「奉仕者」である一作家の経歴が明らかになる。合わせて、筆の提供者はその存在を消し去るといえるのが暗黙の了解であるとしても、それでも

¹²⁾ Pierre DUPUY (1582-1651) , Jacques DUPUY (1591-1656) .

¹³⁾ Daniel HEINSIUS (1580-1655) .当時国際的に知名度の高かった学者で、文献学や歴史などを講じ、ライデン大学では図書館司書を勤めていた。

¹⁴⁾ Louis II de Bourbon-CONDÉ (1621-1686) .大コンデ。ブルボン家の分家のコンデ公アンリ二世とシャルロット-マルグリット・ド・モンモランシの長男。

¹⁵⁾ Albrecht Wenzel Eusebius von WALLENSTEIN (WALDSTEIN, VALSTEIN) (1583-1634) .三〇年戦争期のボヘミアの傭兵隊長。

¹⁶⁾ Vincent VOITURE (1598-1648) .詩人、書簡作家。

¹⁷⁾ Clément MAROT (1496-1544) .フランソワ一世の宮廷詩人。マルグリット・ド・ナヴァールの庇護を受けていた。

¹⁸⁾ Françoise Bertaud de MOTTEVILLE (1615 (?21) -1689) .母后アンヌ・ドートリッシュに仕える。

¹⁹⁾ Anne-Geneviève de Bourbon, duchesse de LONGUEVILLE (1619-1679) .コンデ親王、コンチ親王の姉。

テキストの中では、文学的なエートス²⁰⁾が構築される様を観察できよう。このエートスはそのあり方として、悲劇モデルから借用され、また貴族倫理に依存しているのである。

詩と散文 二つの異なる目的

コンチ親王への奉仕を始めたばかりのサラザンは 1649 年 1 月の親王の参戦以来、その傍らでフロンドを経験する。コンチ親王は〔当初は〕高等法院側につき、兄であるコンデ親王を敵に回し、軍隊を指揮する。コンデ親王が宮廷に忠誠を尽くしていた時期のことである。ポルドーでフロンドが起こり、彼の地で和議の交渉が行われた後にコンチ親王は、最終的にコンデ親王失墜後のギューイエヌ地方の統治権を得ようと、マザランの姪であるアンヌ-マリ・マルチノッチ²¹⁾と 1654 年 2 月 22 日に結婚する²²⁾。1650 年 1 月 18 日の殿下たちの逮捕に続く丸々 1 年の間、サラザンは秘書としてロングヴィル公夫人に随行し、夫人の英雄的な騎馬隊と、そしてストゥネの砦においてスポークスマンを勤める。したがって作家としてみれば、サラザンがコンチ親王かロングヴィル公夫人のどちらかに筆を提供すること、そして散文か韻文のどちらかで執筆すること、この二つのヴァリエーションが考えうるモデルなのである。

1654 年に死んだサラザンは晩年に至るまで詩作を続けている。フロンドが仄めかされていようとも、それは社交界の詩であり、雅な恋愛詩の響きをもつ称赞詩²³⁾である。それは特定の人々に向けて作られ、その集団内で流通する詩であり、如何なる場合でも、一般大衆に広める目的で作られたものではない。社交界の余暇のために書かれた詩は状況の産物とはいえ、歴史的事件が登場するわけではないが、それでも出来事が仄めかされ、接点があるかのような形式で書かれている。1649 年 3 月のリュエイユの和議の後に書かれた「コンデ家の財産継承者である親王妃に」宛てた変則的な詩では、レースをまとうたお上品ではあるが取るにたらない戦さ²⁴⁾を面白おかしく回顧する形式で、「比類無きアンヌ」²⁵⁾と「名高きアルマン」²⁶⁾の二

²⁰⁾ 社会世界で個人々に共有される、習慣による行為や性向を指す。

²¹⁾ Anne-Marie MARTINOZZI (1637-1672)。

²²⁾ (原註) Voir Alain GÉNÉTIOT, « Sarasin, un écrivain dans la Fronde », dans *Gueux, frondeurs, libertins, utopiens. Autres et ailleurs du XVII^e siècle*, dir. Sylvie REQUEMORA-GROS et Philippe CHOMÉTY, Presses Universitaires de Provence, 2013, p.51-60.

²³⁾ Encomiastique < (lat.) Encomium 「称赞」。

²⁴⁾ 士官が優雅にレース飾りをまとい儀礼が重んじられた 17,18 世紀の戦争を指す。

²⁵⁾ コンチ親王の姉、前出ロングヴィル公夫人を指す。

²⁶⁾ コンチ親王を指す。

人が讃えられている。クロミエ在住の小貴族がやってきて親王妃に賛辞を述べる。

彼らは高らかにこう言ったのです。
 あなた様の御令息、御令嬢は
 わが高貴なる町クロミエでは
 内戦のさなか、
 エルプフ様とそのお子様方より
 はるかにご活躍。
 はなはだ愉快な人たちでしょう？
 こんな風にお比べするのは失礼でしょうか？²⁷⁾

社交界と喧騒から遠く離れて得られる同様の抑制された調子が、1649年夏頃の、モントジエ公夫人²⁸⁾、あるいはロングヴィル公夫人に宛てて韻文で書かれた書簡にも見られる。さらにはあの1650年という劇的な年に、ロングヴィル公夫人の気晴らしのためにストゥネで書かれた詩も同様である。『ストゥネに御滞在中のロングヴィル公夫人のために』²⁹⁾と題されたソネでは「宿敵である運命の女神フォルトゥナ」のアレゴリーが用いられる。「愛の神」につれない態度をとるロングヴィル公夫人に、「運命の女神フォルトゥナ」が復讐するのがその内容だが、このアレゴリーが何を指すのか、周囲の関係者には明瞭であった。事件の間近で状況の詩が生み出され、その事件が仄めかされる。深刻に受け取られることのない妖精譚や非現実的な調子で語られ、雅な恋愛文学のしるしとなる遊戯性をまとうために、こうした状況の詩は事件から距離を保つ。喫緊の事件をそのまま反映しているのは、1649年1月にコンチ親王とその姉であるロングヴィル公夫人がフロンドに介入した際に詠まれた、ロングヴィル公夫人と、将来のラ・ロシュフコー侯ことマルシアック公³⁰⁾の不義から生まれた息子シャルル・パリ³¹⁾の誕生に関した詩である。

ご存知ですか。数日前から
 われらが比類無きロングヴィル公夫人は

²⁷⁾ (原註) サラザンのテキストは以下の校訂版から引用する。SARASIN, « Pour un moment quittez le sérieux », *Œuvres*, éd. P.FESTUGIÈRE, t.I, p.362.

²⁸⁾ Julie d'Angennes, duchesse de MONTAUSIER (1607-1671).

²⁹⁾ (原註) *Op. cit.*, t.I, p.256.

³⁰⁾ François VI, duc de la Rochefoucauld, prince de Marcillac François de LA ROCHEFOUCAULD (1613-1680). 『箴言集』 (*Réflexions ou sentences et maximes morales*) の著者。

³¹⁾ Charles-Paris (1649-1672).

愛らしいお子様をなされました。

それで商人頭³²⁾は

オルレ안의パリ様と名付けたのです³³⁾。

『支離滅裂。死から甦ったヴォワチュール氏から勇敢なギシュ騎士殿への滑稽な手紙』からの抜粋である。これはヴォワチュールの模倣^{パステイシユ}だが、ヴォワチュール自身、社交界で好まれた騎士道物語の「古い言葉」を模倣して書いていたものである。『支離滅裂』では、中世の小説に登場する「遍歴の騎士」とフロンド派の人々が比較されている。末尾では、相変わらずクレマン・マロ風のおどけた擬古調で、些かも侮辱的な調子を交えず無邪気な子供が話している感じで、マザラン追放の預言がなされている。

もうすぐだ、人手に渡るよ

あのこつてり肥え太ったサン-ジェルマンの宮廷が。

今は、とにもかくにも

あのおじさんに言ってやれ、出て失せろとね³⁴⁾。

これこそサラザンが得意とした、まさに価値の転覆であり、『ヴォワチュールのお葬式』における滑稽で軽やかな調子そのものである。唯一例外があるとすれば、それはおそらく『旋律にのせて。そうだったらそうなんだ、畜生ったら畜生め!』³⁵⁾に見られるような偽装だろう。これは 1650 年夏、武力で殿下たちを解放すべくヴァンセンヌへ進軍しようとしたチュレンヌ³⁶⁾を称賛した詩で、それゆえ軍歌調で鼓舞されているが、それでもストゥネの小さな社交連を楽しませようと書かれたものなのである。

それというのも実のところ、サラザンは政治にコミットし世論に向けたような小唄をつくっていた歌人でも諷刺詩人でもない。サラザンの作品には、「1649 年 2 月

³²⁾ Prévôt des marchands を指す。パリでは市長に相当する。

³³⁾ (原註) SARASIN, *Coq-à-l'âne, ou lettre burlesque du sieur Voiture ressuscité au preux chevalier Guisheus*, *op.cit.*, t.I, p.356. (訳註)『支離滅裂』(CM797)。本訳稿でマザリナードは«»なしのイタリックで統一し、19 世紀にセレストアン・モローが編纂した書誌の番号を付す。

³⁴⁾ (原註) *Ibid.*, p.358.

³⁵⁾ (原註) *Op. cit.*, t.I, p.316. (訳註) « Sur l'air : Et oui, par la morguienne, vertuguienne, oui ».

³⁶⁾ Henri de la Tour d'Auvergne, vicomte de TURENNE (1611-1675)。フランスの大元帥。

に執筆され1651年1月まで推敲された」³⁷⁾スカロン作『ラ・マザリナード』³⁸⁾や、あえて明瞭に「マロの文体ではない³⁹⁾」と擬古調を退けたシラノの『焼かれた宰相』⁴⁰⁾のような作品はない。17世紀初頭に書かれていたようなジャンルとしての諷刺は、極めて猥褻でかつ糞尿譚が盛り込まれ、嫌悪を催させるような中傷が横行し、度を越えた表現が反逆に形式を与えていた⁴¹⁾。それとは全く正反対に、サラザンは鋭く人をからかう技術に優れていた。これはゲズ・ド・バルザック⁴²⁾が許容した、滑稽を表現する唯一の形式であった。『からかいを交え、微笑み様という名前を献上した御婦人への雅』に大いに感銘を受けたバルザックは次のように言っている。

良いからかいなるものは、氏と育ちの良さのしるしであり、活発で正気の理性から生まれるものだ。学業に励めば習得もでき、広く社交界で磨かれる。きちんと身につければ、習慣も
ピュルレスク
 礼儀も損なうことはない。反対に〔滑稽なるもの〕は、会話では誰もが敬遠するよう
ガラン
 な仕方ですら書こうとするものだから、工夫も高貴さも雅もない⁴³⁾。

親しみやすくも絶えず優雅で、決して下劣に堕さないこうした調子は、したがって雅であることのしるしとなる。猥褻な滑稽は雅からは離れてしまう。上で引用した韻文のマザリナードでは、糞尿とカーニヴァル風な下ネタが用いられ、噂のあったマザランの男色趣味が諷刺の対象となり、死刑への期待で幕が閉じられている。さらに言えば、かつてサラザンは『寄生者の戦さ』⁴⁴⁾という1644年の作品において、学者かつユマニスト⁴⁵⁾としてネオ・ラテン調に、ラテン語をもじった混交体の調子を用いていた。それゆえ上品な社交界で期待されていた礼儀の要求に反し

³⁷⁾ (原註) スカロンの校訂版を編集したモーリス・コーシによる。Selon Maurice CAUCHIE dans son édition de Paul SCARRON, *Poésies diverses*, STFM, 1960, t. II, p.15.

³⁸⁾ Paul SCARRON (1610-1660). 文学ジャンルとしての「ピュルレスク」を代表する作家。La Mazarinade (CM2436).

³⁹⁾ (原註) Savinien CYRANO DE BERGERAC, *Le Ministre d'État flambé* dans *Œuvres complètes*, t.2, Lettres, Entretiens pointus, Mazarinades, éd. Luciano ERBA et Hubert CARRIER, Paris, H. Champion, 2001, p.422.

⁴⁰⁾ Savinien CYRANO DE BERGERAC (1619-1655). *Ministre d'État flambé* (CM2470).

⁴¹⁾ (原註) Voir Michel JEANNERET, *Eros rebelle*, Paris, Seuil, 2003.

⁴²⁾ Jean-Louis GUEZ DE BALZAC (1595-1654). 17世紀前半に活動した文芸者。書簡作品で知られる。

⁴³⁾ (原註) Jean-Louis GÉNETIOT, « Portrait de Montmaur en Orbilius : Sarasin rénovateur des Anciens », dans *Les Actes du colloque L'Affaire Montmaur* (UVSQ-Sorbonne, 14-15 juin 2013), dir. Carine BARBAFIERI et Jean-Marc CIVARDI, PUPS, à paraître.

⁴⁴⁾ *Attici Segundi G. Orbilius musca sive Bellum parasiticum. Satira*, Parisiis, 1644. サラザンはローマの悲劇詩人の名を借りた「第二のアッキウス」(Atticus Secundus)の名で発表した。

⁴⁵⁾ (原註) Voir Alain GÉNETIOT, « Portrait de Montmaur en Orbilius : Sarasin rénovateur des Anciens », dans *Les Actes du colloque L'Affaire Montmaur* (UVSQ-Sorbonne, 14-15 juin 2013), dir. Carine BARBAFIERI et Jean-Marc CIVARDI, PUPS, à paraître.

た、破格の用法そのものの調子が与えられていた。私的な会合内だけで回覧される詩は、参加者の仲間意識に依存する。散文で書かれたマザリナードとは異なり、人口に膾炙するのが目的で作られているのではない。

実際のところ散文 (*les discours en prose*) は (この名称はリシュレが「大概著者名が入っていない中傷文書⁴⁶⁾」と定義している小冊子 (*libelle*) という語よりも適切だろう)、読者層を劇的に拡大するところに特徴がある。サラザンが散文において、秘書として仕えていた雇い主のために執筆する場合には、自らの姿を消している。実際、『ロングヴィル公夫人から王への手紙』⁴⁷⁾では、唯一の名宛人として名指されているのは王である。これはロングヴィル公夫人が亡命中の1650年2月28日にロッテルダムで書かれたテキストである。パリの高等法院司法官に宛てられた『殿下たちの擁護』⁴⁸⁾も同様である。まず『王からパリの高等法院への手紙』⁴⁹⁾ではコンデ親王が事件の首謀者とされ攻撃がなされる。これに対して逐一反論をしたのが、1650年3月28日以降に執筆された『殿下たちの擁護』である。『ロングヴィル公夫人から王への手紙』と『殿下たちの擁護』は拡散を目的として、公開書簡のような体裁をとる。反対に『ロングヴィル公夫人の声明文』⁵⁰⁾というテキストは、題名からも分かるように、そもそも最初から世論に狙いを定めている。ロングヴィル公夫人は世論を証人として、味方につけたいと考えている。というのも夫人は、1650年4月20日にスペインと結んだ同盟条約に関して、「締結に至るまで私がとった行動を公衆に報告し」、夫人の意図を「全世界に知らせ⁵¹⁾」ねばならないからである。同様に、公衆に対して自分に関する真相だけを明かすという意図を超えた結論が示される。曰く、「これこそ、公衆が知らされねばならないと私が判断した真相の数々なのです⁵²⁾。」

より直接的かつ過激な言葉で綴られた『ロングヴィル公夫人とチュレンヌ氏がカトリック王⁵³⁾と交わす条約の動機』はおそらくは前述の『声明文』の初稿と考えられる。公衆に呼びかけ、マザランの犯した罪に唯一対抗できる手段として殿下たちを救い出すよう、「善良なるフランス人」に決起が促される。

⁴⁶⁾ (原註) Pierre RICHELET, *Dictionnaire françois*, Genève, Jean Herman Widerhold, 1680, art. « Libelle ». (訳註) César-Pierre RICHELET (1626-1698). アカデミ・フランセーズに先駆けて1680年にフランス語辞典を編纂した。

⁴⁷⁾ *Lettre de Mme la duchesse de Longueville au roi* (CM1950).

⁴⁸⁾ *Apologie pour Messieurs les Princes* (CM126).

⁴⁹⁾ *Lettre du roi au Parlement de Paris* (CM2138).

⁵⁰⁾ *Manifeste de Mme la duchesse de Longueville* (CM2363).

⁵¹⁾ (原註) *Manifeste de Mme la duchesse de Longueville, op.cit.*, t.II, p.434-435.

⁵²⁾ (原註) *Ibid.*, p.441.

⁵³⁾ スペイン王を指す。

ここに、われわれの交わした条約全文を公衆の判断に喜んでゆだねよう。我が国を破滅させようとしたマザラン枢機卿に対し、善良なるフランス人が依然嫌悪を抱いているなら、この条約は亡国の危機を救う絶好の機会となる。殿下たちを解放するしかない。さすれば必ずや和平が訪れよう⁵⁴。

同様に『コンデ家の財産継承者である親王妃の死と最後の言葉』はフランスの民衆、より正確にはパリ市民に向けられ、1650年12月2日の親王妃の死⁵⁵を悲痛な調子で知らせている。

フランスの民衆よ、この世の中でこれまで王と王家に極めて忠実かつ献身的であった国民よ、そして最も強大な君主制の名誉にして魂でもあるパリ市民よ、我が汝らに告げる知らせを聞いて涙するがよい。天が汝らに賜った女性のなかでも最も偉大にして最良のお方、母親のうちで最大の幸福を受けられた方が亡くなられた。この国が諸王国にあっても最も輝かしい勝利を収めたこの時に、コンデ親王妃ことシャルロット-マルグリット・ド・モンモランシ様が亡くなられたのだ⁵⁶。

1651年2月13日に殿下たちが釈放されると、ロングヴィル公夫人は次なる行動計画へと移り、一連の、いわば第二段階の⁵⁷散文が繰り出される。これはコンチ親王に係る文書で、これまで同様法的な観点から執筆され、自己の防衛と敵への攻撃が入り混じる。『偽のフロンド派に好意的なフロンド派』、そして『パリ大司教補の行動に関する、パリの教会財産管理人から主任司祭への手紙』⁵⁸という二つの文書においてサラザンは、1651年夏に王妃に近づいたゴンディ〔枢機卿〕を攻撃する。ゴンディが個人的な利害に基づいて行動したと非難したのである。ちょうど8月17日にコンデ親王が国家に対する裏切り行為で断罪されたばかりであった。こうした筆による戦争において、コンデ親王派のパンフレ作家であるサラザンは『好意的なフロンド派』で、かつての庇護者であるゴンディを難詰する。冒頭部分

⁵⁴ (原註) *Motifs du traité de Madame la duchesse de Longueville et de Monsieur de Turenne avec le Roi catholique, Revus et corrigés. Jouxte la copie imprimée à la Haye, 1650, p.4-5.* (訳註) CM2506

⁵⁵ Charlotte-Marguerite de MONTMORENCY (1594-1650).コンデ親王、コンチ親王、ロングヴィル公夫人の母。

⁵⁶ (原註) *Les dernières paroles et la mort de Madame la princesse douairière de Condé, s.l., 1650, p.3.* (訳註) CM1038

⁵⁷ (原註) Voir Sophie VERGNES, *Les Frondeuses. Une révolte au féminin (1643-1661)*, Seyssel, Champ Vallon, 2013, p.325-326.

⁵⁸ *Lettre d'un marguillier de Paris à son curé sur la conduite de Mgr le coadjuteur* (CM1885) .

ではゴンディへの奉仕が仄めかされ、事情に通じた人たちへの目配せとなっている。

あなた様 [レ] の本当の意見がすでに ^{おおよげ}公 にされているのと変わらず寛容なものであれば、何があっても、私はあなた様の利害から離れたり、あなた様の行動に感じていた愛着を断ち切ることもなかったでしょう。公共善と栄光は善行からとはよく言われるところですが、あなた様にあらまはしては、公共善と栄光こそ、ご行動の唯一の原因のようにお見受けいたします⁵⁹⁾。

『教会財産管理人の手紙』は、ゴンディの書いたパンフレ『パリ大司教補の行動に関する公平無私な意見』⁶⁰⁾に対する、コンデ親王の援助を得て書かれた返答である。サラザンは、教区の運営を担う俗人であるパリの教会財産管理人という登場人物を装い、主人である高位聖職者の行動を内部から批判する。架空の対話では、パリ大司教補と保護—被保護の関係にある「ブルジョワ名士⁶¹⁾」の視点を表明しているかに見せかける。舞台設定の巧みさに注意されたい。架空の対話にも関わらず、まるで実際に行われたかのようなのである。それほどこの対話はほんとうらしく⁶²⁾、ゴンディの『公平無私な意見』を読んだパリのブルジョワ団体の反応のように提示されている。パリの「ブルジョワ名士」は、ローカルの現状に精通している者として、ゴンディの提示する論点を内側から突き崩す。「意見は一致していた」「～と言われている」「各々の述べるところでは」⁶³⁾など一般を装った形式を積み重ね、『教会財産管理人の手紙』では「民衆の声」、すなわち世論の見本として、さも対話者に発言をさせているかのように見せかけている。そうかとおもえば、このパンフレでは架空の、しかしさもあり、そんな世論を信じさせようと、宮殿の事情通から聞いてきたかのように、世論が捏造されている。その3年後、コンチ親王が宮廷と和解した時期に書かれたフロンドの最後の文書である『ギューエンヌでの事件のための覚書』⁶⁴⁾はボルドーのフロンドの年代記となっており、コンデ親王と比較して、コンチ親王の立場が公けに正当化されている。したがって、歴史的な諸事件

⁵⁹⁾ (原註) SARASIN, *Le Frondeur bien intentionné, op.cit.*, t.II, p.442. (訳註) CM1451.

⁶⁰⁾ *L'avis désintéressé sur la conduite de monseigneur le coadjuteur* (CM510).

⁶¹⁾ (原註) *Ibid.*, p.447.

⁶²⁾ 原文で強調されているわけではない。傍点を付した理由については付論を参照されたい。

⁶³⁾ (原註) *Ibid.*, p.449.

⁶⁴⁾ *Mémoires pour servir aux affaires de Guyenne*. 著者によると、フェスチュジュールによるサラザン『作品集』(t.II, p.461)に収録されている。『覚書』はモローの書誌に掲載されておらず、また『作品集』でマザリナードとして扱われているかどうかは確認できなかった。但し、以下の書に付された註によると、『覚書』はコンチ親王の命令で執筆され、BNF所蔵の「コンデ親王ファイル」に含まれ、欄外に「サラザン」の名が記されているそうである。Gabriel-Jules COSNAC, *Souvenir du règne de Louis XIV par le comte de Cosnac*, Paris, Renouard, 1882, t.8, p.297.

を報告するだけで満足するのではなく、テキストそれ自体が歴史の流れの方向性を変える歴史的出来事となる。いずれにせよ、これら匿名の文書が公になれば、詩の読者という限定された公衆が、狙いを定められた世論という公衆へと拡大される。またロングヴィル公夫人が支援を求めた貴族層や、殿下たちがパリ大司教補に対抗するために巻き込もうとしたパリのブルジョワ、さらには世論が拡大されるのである。

英雄たちと一つの悲劇

擁護を旨とする論争文書は、政治におけるコミュニケーションを実践するテキストであり、目前の脅威に対する即座の行為となる。個別の真理を舞台にのせ、自分たちの側の見解を、党派を前提とした二元論的ヴィジョンにはめ込む。それゆえにサラザンは、法律文書で用いられるような実効性のある修辞技法を利用する。それは防御と攻撃の両方を併せ持つ、二通りの様式に由来する。社交界の詩人はここでは弁護士にして検察官、書斎の人にしてコミュニケーションの人であり、司法官のように法律の議論を操作しながら、同時に議論を舞台にのせて執筆するよう配慮する。そのようにしつつ、詩人はほんとうらしい語りごとを語り、哀れみと恐れといった悲劇の感情を創り出す劇作術を練り上げる。政治コミュニケーションの策略家であるサラザンは、憐憫の情に訴えつつ、殿下たちを犠牲者に仕立て上げる。そして返す刀で、殿下たちが宮廷に再び服従を誓っているためにマザランを宮廷から切り離しておいて、マザランを悪魔として描き出す。文中でまずは悲愴バテチツクを漂わせながら殿下たちが紹介され、その殿下たちになされた誤ちの修復が目論まれる。このように殿下たちの擁護が正当化される。『殿下たちの擁護』という題名は殿下たちの一人がつけたもので、題名が示すように、『王からパリの高等法院への手紙』で展開されている議論に逐一反論がなされる。まずは検察官の弁があり、弁護側の発言が後に続く。『王からの手紙』以降ロングヴィル公夫人は、迫害者マザランに追いつめられた犠牲者として描かれる。マザランとはいえば、我が身の被る「数々の不幸」に対して哀れみの情を惹起しようとする。マザランに追いつめられた結果、夫人は王に絶対服従を誓っている関係で、王の「同盟」国であるオランダに亡命を余儀なくされる⁶⁵⁾。ロングヴィル公夫人のために書かれた論争文書では実際のところ常に、正当な理由なく投獄された殿下たちと、亡命を余儀なくされた夫人の犠牲の姿が描かれている。女性のエートネスバテチツクを描写するに際して、悲愴の感情移入

⁶⁵⁾ (原註) *Apologie, op.cit.*, p.288.

が促されるのが慣習であるだけに一層の効果がある。大量の涙を流しながら懇願がなされ、高等法院の人々の憐憫の情に働きかけるべく真剣な訴えがなされる。『殿下たちの擁護』が結論部で示すのもこれである。

[高等法院の] みなさん、結論に入ります。いずれにせよ、涙と苦しみのせいで、これ以上みなさんにお話しすることができません。しかしながら、みなさんの公正性と美徳に鑑みて、私は既に半ば慰めを得ております。みなさんがわれわれの涙をぬぐい去り、われわれの不幸を終わらせてくださるに違いないという確かな希望を私に抱かせてくださらんことを⁶⁶⁾。

こうした謙虚さの^{エートス}は女性の苦しみの^{トポス}⁶⁷⁾と一致するもので、中傷から苦しみを遠ざけ憐憫を助長しながら、擁護に社交礼儀を付与してくれる。

以上の障害に加え、引き続き私の弁論では、もがき苦しんでいる、あの著名な方々[殿下たち]を擁護し、彼らの破滅を目論む輩のペテンを白日の下に晒さねばならないために、私はそれに嫌悪感を覚える次第です。それというのも、自分の気質と、女性という私の性別に備わる^{ピアンセアンス}礼儀正しきゆえに、どなたかを非難するのは残念でならないからですし、また持ち前の謙虚さゆえに、我が一族の自画自賛は差し控えるよう促されるものですから⁶⁸⁾。

しかしながら、『コンデ家の財産継承者である親王妃の死と最後の言葉』においてこそ、悲愴感^{パテチツク}は頂点に達する。殿下たちの母の死という悲報が持ち出され、子どもが迫害されて、母である親王妃が感じた悲しみがそこに結びつけられる。これにより、論に悲愴味^{パテチツク}を帯びた強力な武器が付け加わる。親王妃は犠牲者であり、神にしかおすがりできなかった。そこで上品な文体に属する修辞技法の擬人法が用いられ、死んだ親王妃の言葉が彼方からのメッセージとして甦る。

[お亡くなりになった] 親王妃にお子様方の健康状態の悪化とコンチ親王殿の病気の懸念について報告がなされた。親王妃はさめざめ泣かれ、私はひとり孤独な状態にあり、自然の感情からも、そして[コンチ親王が]^{おおやけ}公に尽くす人物で、国からもっと大切に思われるべきお方であることを想うとなおさら泣けてくるのですとおっしゃっていたのですが、すぐさま我に返

⁶⁶⁾ (原註) SARASIN, *Apologie pour messieurs les Princes*, op.cit., t. II, p. 433.

⁶⁷⁾ ギリシア語で「場所」を意味し、アリストテレスの『詩学』では情念などを喚起する定型表現を指す。

⁶⁸⁾ (原註) *Ibid.*, p.310-311.

り、次のように言われました。

私が肉体の喪失を嘆いているかどうか、すべての涙を魂に捧げていないかどうか、神が証人となりましょう。親王妃は繰り返されました。そうです、神よ、あなた様は私の苦しみの原因をご存知です。コンチ親王を失うことで、私はフランスという国と意見を同じくしたいのです。さらにあなた様がお望みなら、一族の断絶も覚悟しております。根絶やしにされよ。私自身も無に帰されよ。しかし、どうぞわれわれの魂はお救い下さい。コンチ親王が亡くなりますように。それが私の望みです。しかし親王がルイ聖王に相応しい息子として死ねますように。私は親王を良く存じ上げています。善良な方です。神よ、親王を殉教者となされよ。親王は無実です。親王に残されているのは、敵に許しを与えることだけなのです⁶⁹⁾。

親王妃がキリスト教徒として死に、それを引き起こしたのが母親としての苦しみであるなら、そのとき死は政治的な意味合いを帯びてくる。

親王妃は病気であったほぼ 40 日もの間、その他のことについて一切お考えになりませんでした。そこでご病気の原因といえは、お子様方が鎖で繋がれたガレー船漕役囚のようにあちこち引き回され、終いにはおぞましいことこの上ない監獄や、監獄がなければ閉じ込められることもなかった人々にさえ死をもたらすような場所に監禁される... 無念にもそんなお姿を目にされることくらいしか思いあたりません⁷⁰⁾。

さらに結論部では、悲劇におけるのと同様に過酷な運命と、そしてフランスの筆頭貴族にして親王妃をフランス民衆の母に据えた、あの偉大で盛名高らかなモンモランシ家の失墜が話題となる。

モンモランシ家の運命には、フランスという国にとって何か計り知れない宿命のようなものがあります。あなた方が惜しんでも惜しみきれない哀れなモンモランシ様は血なまぐさい恩顧を受けつつ、フランスの土台作りに尽力されました。妹君であられる親王妃は不吉極まりない運命の舞台上で殺されたばかりですが、親王妃が国家と王家にもたらされるさらに大きな不幸の前兆とならぬよう、神にお祈り下さい。そして親王妃のお子様方が孤児となり、もう一人の母

⁶⁹⁾ (原註) *Les dernières paroles, op.cit.*, p.4-5.

⁷⁰⁾ (原註) *Ibid.*

であるフランスの助けと愛を請い願うまでになるという、とどめの一撃にご同情くださいますように⁷¹⁾。

声望ある名家の不幸な運命が憐憫の情をそそるといふこの悲劇の構造は、アリストテレスが悲劇の特徴として言及していた、恐怖というもう一つ別の感情にも基づいている。恐怖を抱けば、敵方は宮廷ではなく、マザランこそが横暴で憎悪に満ちた迫害者として現れる。スカロンの『ラ・マザリナード』ではグロテスクな人物として笑いにされたマザランが、ここでは、殿下たちのみならず、王と王国全体の敵という悪魔的な様相を呈している。叙事詩的な体裁をとった『ロングヴィル公夫人から王への手紙』でも同様である。

しかしながら、あの輩 [マザラン] は私を破滅させるか追放する計画を立てていましたが、何としてでもそれを成し遂げなかったのです。加えて、かつて私が命令を出していたおかげで、地方では何ら抵抗がないこともマザランは承知していました。他のどんなことよりも、自らの虚栄心と憎しみを満足させようと画策していました。私のしてきたことからすれば、私を破滅させねばならないような理由などなく、彼の企みには正当な口実さえ欠けていたのに。あの輩は厄介な季節に陛下をパリの外に連れ出しました。服従した地方に進軍させ、危うくその地に暴動を起こさせるところでした。ピカルディ地方の境界にいた兵士を撤退させ、この地方を敵の脅威に晒してしまいました。外国での戦争では陛下の軍隊を壊滅させました。最後に、あなた様という神聖なお方を悪疫の猛威に晒しました。危険であったため最下層の下臈にいたるまで遠ざかっていた時期に、陛下をルーアンに逗留させたのです⁷²⁾。

そして『殿下たちの擁護』^{ハテチツク}では、マザランに向けられた最後の悪口は結論にいたるまで維持され、一層悲愴で激しい効果を生み出してはいるが、それでも依然として悲劇に相応しい上品な語彙で展開されていることに変わりはない。

今や、我が国から悪疫の元凶である人物 [マザラン] を追い出すときがきました。政府からその人物を取り除くときです。無能にして不適任、それに裏切り者です。善良な民の敵で、神からも人からも憎まれてます。罵りと不実でも神も侮辱する輩です。民衆の悲惨につけ込み野心を掲げ、悪巧みの完遂を目論みました。自らの行いはすべからく叛逆となるよう望みまし

⁷¹⁾ (原註) *Ibid.*, p.6-7.

⁷²⁾ (原註) *Lettre au roi, op.cit.*, t.II, p.286. (訳註) 講演当日は時間の都合で、この引用は省略された。

た。さらなる戦争を生み出し、外国での戦争終結をしぶり、またもや内戦を始めました。最後に、われわれをかくも低いところまで押しやったために、今の悲惨な状況下でわれわれに残されているものといえば、もはや死と服従だけとなってしまいました⁷³⁾。

『ロングヴィル公夫人の声明文』では、横暴な犯罪者である宰相を描くときにも、危機を強調する時にも、より雄弁で誇張的な調子となる。「王家の一部は絶壁の淵に、フランスは今にも崩壊の寸前⁷⁴⁾」にあると言い、「不吉な侵害行為」と「怒り⁷⁵⁾」に言及しながら、恐怖に関する悲劇の語彙をさらに展開しているのがその理由である。ロングヴィル公夫人は、横暴な人物の手にかかったか弱い犠牲者で、命からがら逃亡を余儀なくされている。

(...) 私の無実も、女性という性も、私の身分をもってしても、自宅で、私が隠居していた田舎屋での孤独な生活では身の安全が保障されず、私たちを完膚なきまで破滅させることで復讐をとげようと、あの宰相は法外な情念を抱き、何が何でも私を陥れ追放しようと情念に煽られているので、私はフランスを離れざるを得ませんでした。

私は夜陰に乗じて、冬の間、悪天候で極度の危険が伴う困難な停泊地から出帆しました。私は王国の同盟者のところへ平安を求めてたどり着きました。あの外国人の犯す犯罪が横行している我が国では平安など決して手に入るものではありませんまい⁷⁶⁾。

この悲劇の描写では、どこの箇所からも怒りが伺える⁷⁷⁾。ロングヴィル公夫人は国家の大義のために死の危険を冒して亡命し、追いつめられた犠牲者として描かれている。これは悲劇の定義そのものであろう。夫人の前には、容赦なく犠牲者に襲いかかる、血に餓えた敵が立ちはだかり、神聖な日に襲撃をしかけてくる⁷⁸⁾。

1651年、『偽のフロンド派に好意的なフロンド派』では、亡命中のマザランの代わりにゴンディが敵対者とされる。ゴンディはマキャヴェリズムを糾弾され、「強烈な支配欲」と策略の烙印を押されている。ゴンディは「フランスの臓腑に不和の火種を再び灯し、王家を散り散りにし、高等法院を貶め、民衆を反乱に駆り立て

⁷³⁾ (原註) *Apologie, op.cit.*, t.II, p.432.

⁷⁴⁾ (原註) *Manifeste, op.cit.*, p.435.

⁷⁵⁾ (原註) *Ibid.*

⁷⁶⁾ (原註) *Manifeste, op.cit.*, t.II, p.435-436.

⁷⁷⁾ (原註) *Ibid.*, p.436. (訳註) 原稿には引用があったが講演時に省略されたため、それに倣う。

⁷⁸⁾ (原註) *Ibid.*, p.437. (訳註) 同上。「神聖な日」とは省略された引用中の「復活祭の日」を指す。

る⁷⁹⁾」。

しかし、災禍が広がるこの時期、殿下たちが王国の敵に対抗する王権の唯一の頼みの綱として提示されるや否や、論争文書では防衛から攻撃への移行がなされ、英雄のエピソードが構築される。ここで殿下たちの都合に合わせ、王国版巨人族の戦い⁸⁰⁾のアレゴリーが持ち出される。これはマレルブ⁸¹⁾がアンリ四世とルイ十三世に対して用いていたアレゴリーで、『リムーザン地方に出発する王への祈り』と『ラ・ロシェルでの反乱に懲罰を与えに行く王のために』のそれぞれに現れる。正統な英雄が反抗的な巨人がもたらした混乱^{カオス}を治めて秩序を回復するというアレゴリーである。擁護を目的とした散文では、反徒とは反抗した殿下たちではなく、マザラン、次いでゴンディという篡奪者のほうである。英雄である殿下たちが王のために行動し、篡奪者が王国を破滅させたりできないようにする。こうして『殿下たちの擁護』のような法を扱うテキストでは、迷宮、混乱^{カオス}、怪物のような残虐さ、悪の暗闇といった比喩が展開され、無秩序には秩序が、混乱^{カオス}には光明が対置され、邪悪さが英雄による秩序の回復を呼びおこす。

しかしながら、これほど多くの怪物を退治してしまえば、残りの亡霊にはそれほど手間はかからないでしょう。マザラン枢機卿が、私の兄弟たち〔殿下たち〕と夫の汚れ無き命と感情に毒を吐きかけさせようと、絶え間なくヒュドラの首を再生させてはいますが、これを地にねじ伏せ、頭という頭の息の根を止めてしまいうとまを私に授けるためにほんの少し注意を向けてくだされば、それで十分です⁸²⁾。

これとはまた別の、控えめで事実に基づいた『ギュイエンヌでの事件のための覚書』では、ボルドーで生じたフロンドの報告がなされる。サラザンは『ダンケルク包囲戦の歴史』や『ヴァレンシュタインの陰謀』で見せた歴史家の文体を再び用いてはいるが、それでもアスタフォールの戦いでしたように、英雄を描く細部の描写は際立っている⁸³⁾。

『殿下たちの擁護』の主目的は、向けられた中傷に対して評判を守ることである。

⁷⁹⁾ (原註) *Le Frondeur bien intentionné, op.cit.*, p.444-445.

⁸⁰⁾ ギリシア神話にある、巨人族とオリンポスの神々との戦いを指す。

⁸¹⁾ François de MALHERBE (1555-1628). 古典主義詩学を準備した詩人として知られる。

⁸²⁾ (原註) *Apologie, op.cit.*, t.II, p.398-399.

⁸³⁾ (原註) *Mémoires pour servir aux affaires de Guyenne, op.cit.*, t.II, p.464-465. (訳註) 原稿には引用があったが講演時に省略されたため、それに倣う。

貴族倫理の基礎をなす価値、すなわちまずもって名誉が重要なのである⁸⁴⁾。

したがってロングヴィル公夫人は必要にかられて、この時代の悲劇のヒロインのように強い女性となり、家系の名誉を守るため、再び灯明を取り戻さなければならぬ。

人物像の対比はプルタルコス技法に由来する。それは歴史家とはモラリストであり、人の生こそが歴史であるというコンセプトに基づいたものだ。この方法を採用すれば、寛容な闘争家が持つ英雄倫理という本質的な点に関して、コンデとマザランの対比が可能となる。

実際、これらの急流でも彼〔コンデ親王〕の家は浸水しませんでした。親王は両親も従僕も、彼らの財産が妬まれるほど高い場所に避難させたりしませんでした。反対に、コンデ親王が血気盛んで、次から次へとフランスには欠かせない勝利を勝ち取っていた時期、成果といえばコンデ親王とかの有名な遠征に随行した人々が数々の危険と苦しみを経てもぎ取ってきた栄光だけというその時期に、マザラン枢機卿はといえば、無為で自堕落な生の快樂に溺れ、財をほしいままにし、手下たちはマザランの繁栄に酔いしれて国家の富と役職を食いつぶしていたのを誰もが目にしていたのです⁸⁵⁾。

『殿下たちの擁護』ではこのようにコンデ親王の軍事的な勝利が強調され、マザランの強欲への非難と、親王の私心のなさが対比される⁸⁶⁾。

それというのも、コルネイユ⁸⁷⁾風の「寛大」で、とりわけ宮廷に対して忠誠を誓った英雄が私利私欲にとらわれていないこと、これこそが英雄であることの最大の証であるからだ。封建社会における反乱どころか、前面に押し出されるのは『ル・シッド』から『シンナ』に至るまで、コルネイユの演出した王への忠誠心である。マザランの虚偽と不正を前に、血統殿下たちがその身分に相応しく幼年の王を支える使命を担い、王権に忠誠を誓う非の打ちどころのない臣下である、そのように描くことこそが重要なのだ。そしてフロンドが潰え、兄であるコンデ親王はスペインと同盟を結ぶという究極の選択をし、コンチ親王は連帯を解除するが、その折りも依然としてコンチ親王は王への忠誠心を前面に押し出すことになる。

⁸⁴⁾ (原註) *Apologie, op.cit.*, t.II, p.309. (訳註) 同上。

⁸⁵⁾ (原註) *Ibid.*, p.319-320.

⁸⁶⁾ (原註) *Ibid.*, p.324. (訳註) 原稿には引用があったが講演時に省略されたため、それに倣う。

⁸⁷⁾ Pierre CORNEILLE (1606-1684) 劇中に登場する英雄像は古典主義時代のモラルを体現すると言われる。『ル・シッド』は1637年初演の悲喜劇でコルネイユの代表作とされる。『シンナ』は1642年初演の悲劇。

したがって、正規の悲劇がほんとうらしさに則り構築されるように、これらの散文は篡奪者の嘘に正統な殿下たちの真実を対置させつつ誠実さを表明する。すでに『ロングヴィル公夫人から王への手紙』以来、ロングヴィル公夫人の従順、忠誠心、そして宮廷への服従は表明されており、これに変わりはない⁸⁸⁾。

『殿下たちの擁護』でも同様に、敵方の戦略は暴かれ、夫人の言葉が対置される。誠実の太鼓判を押された夫人の言葉は、中傷ばかり積み重ねていく敵方の謀略に対抗した、自発的な言葉である⁸⁹⁾。

訴訟においてはすべからく、裁判官を説得するためにほんとうらしい記述を構築することが重要なのである。

殿下たちの秘書であったサラザンは、したがって、文章を書く技術に熟達した博学な歴史家の才能を全面的に生かし、筆による奉仕を果たした。また政務室では煩瑣な法律の議論と政治コミュニケーションで鍛えられた実務家の才能を用い、皮肉を込めるにせよ中傷にまで貶めてしまわない社交界の詩人の才能を活用した。敵をからかうにも模倣に訴え、言葉遣いには社交礼儀を保ち、詩は雅にして散文には悲愴感を漂わせる。宮廷、貴族、そしてパリのブルジョワの説得を試みた、殿下たちを擁護するための散文の基礎には、貴族的な価値論が横たわる。サラザンは言表の誠実さを保証する美德と権利を重んじる立場から、貴族の価値論を用いて反乱を正当化するのではなく、それを宮廷への奉仕として提示するよう細心の注意を怠らない。そのような実践をしながら、悲劇の様式に則り文学作品を構築する。サラザンは悲劇の様式を利用し、貴族的なエートスに合致した上品な文体で、迫害者に関しては強烈な恐怖の感情を、犠牲者たちには憐憫の情を呼び起こそうとする。不幸な運命の犠牲者である英雄（サラザンのテキストでは女性の英雄となるが）、そうした英雄が現れ輝かしい活躍をする。サラザンは自己が抱く勝利の確信を他者のために構築する。そのために作家としては匿名を維持し、借用した登場人物の背後に身を隠す。登場人物は時に実在するロングヴィル公夫人であり、また架空の教会財産管理人である。したがって、これらのテキストの真の文学的な価値とは、作家の要求が如何なるものであれ、それとは独立して存在しているのだ。作家は匿名性の論理を極限まで押し進める。それは、すでに共謀関係にある、直接交流する公衆には知られているが大衆には知られていない、そんな社交界に属する作家の論理である。サラザンは、ペリソンが敢えて書かなければ文学史では無名に

⁸⁸⁾ (原註) *Lettre au roi, op.cit., t.II, p.284-285*. (訳註) 原稿には引用があったが講演時に省略されたため、それに倣う。

⁸⁹⁾ (原註) *Apologie, op.cit., t.II, p.311*. (訳註) 同上。

留まり、フロンド期の活動については完全に無視されるような存在だった。だがサラザンは、現代の詩人フィリップ・ジャコテ⁹⁰⁾による「姿を消すのは私が輝く方法」を遥かに先取りしていたようにも思われるのである。

⁹⁰⁾ Philippe JACCOTTET (1925- 2021).